

ムーソルクスキの朗唱法研究

— 歌曲《隅っこで》に注目して —

菊池可奈子

(本講座大学院博士課程前期在学)

本研究は、筆者が修士論文のテーマとしているムーソルクスキ **Модест Петрович Мусоргский** (1839-1881) の歌曲研究の一部を成すものである。日本ではピアノ組曲《展覧会の絵》や管弦楽曲《禿山の一夜》で有名なムーソルクスキであるが、彼の作曲人生におけるもっとも重要なテーマは、ロシア語の話し方に特徴的な抑揚を音楽で実現することであった。そのためムーソルクスキ自身が特に熱心に取り組んでいたのはオペラと歌曲であった。ムーソルクスキの作品で完成されているのは、舞台作品が3曲、合唱曲が10曲、ピアノのための作品が16曲、管弦楽曲が4曲、歌曲が65曲で、特に歌曲については生涯にわたって絶え間なく作曲されており、ムーソルクスキにとって重要なジャンルであったことがうかがえる。

それを踏まえ、ムーソルクスキの朗唱法とはいったいどのような内容であったのかを歌曲の分析から考察、解明していくことが修士論文のテーマとなっている。本稿ではムーソルクスキの歌曲10曲を選んで行った音高とリズムにおける分析の結果と、その中で特徴的な結果が見られた歌曲《隅っこで *В углу*》の楽曲分析に焦点を当てて述べていく。

I. 音高関係とリズムの分析結果

ロシア語の話し言葉を音楽に忠実に再現する上で重要となるのは、音高とリズムであろう。そのため筆者はムーソルクスキの歌曲の中から10曲を選び、その音高とリズムがロシア語の話し言葉とどの程度一致しているのかをパーセンテージで集計することとした。本稿では便宜上、歌曲や話し言葉の音程の上がり下がりについて『音高関係』と名付け、音高関係やリズムの歌曲と話し言葉の一致の度合いは『一致度』と呼ぶこととする。

1. それぞれの分析方法

a. 音高

ロシア語による歌詞の朗読サンプルの採取には、広島大学総合科学部でロシア語の授業を担当しているトルストグゾフ **Сергей Толстогузов** 先生にご協力いただいた。ロシア語の標準語はモスクワ方言だが、トルストグゾフ先生の使用されているロシア語もその標準語であり、ロシア語の話し言葉のサンプルとして信頼性が高いものと判断した。トルストグゾフ先生に歌曲の歌詞を朗読していただき、その音高関係と歌曲の音高関係の比較を行った。

トルストグゾフ先生には、今回研究対象にしたムーソルクスキの歌曲10曲の歌詞を朗読していただき、それを録音した。そしてその録音を元に、音声解析ソフト、マルチスピーチ3700を用いて音高の分析を行った。分析する際、歌曲で1音が当てはめられている音節を最小の単位と考え、その部分の音高の平均を出した。音高は $a = 440$ ヘルツの設定で採取し、セントに変換する際は 220 ヘルツ = 0 セントという設定にした。朗読をヘルツからセントへ変換する際に使用した式は $1200 \times \log_2 (X/220)$ である。歌曲については『歌曲集』に記載されている音高をそのままセントへ置き換えた。

音高関係が朗読と歌曲で一致しているかどうかは、歌曲と朗読のそれぞれの上がり下がり単に一致しているかそうでないかで判断した。つまり上がり下がりの幅は考慮に入れなかったのであるが、朗読に関してはセントの幅が100以内であれば同じ音程と判断することとした。なぜなら歌曲は12平均律を使用

して構成されているので、半音の間は必ず100セントとなる。歌曲が同じ音程で動いている場合に朗読が1セントでも上下していれば一致でない、と判断すると、歌曲が同じ音程で動いている場合には朗読とは必ず一致しないことになってしまうためである。

音高関係を調べるにあたってもうひとつ考慮したのは文の切れ目である。意味が切れている部分の音高関係が一致している必要はないので、その部分は集計に含めない形で計算した。意味の切れ目は、多くの場合コンマやピリオドを参考にして判断した。

b. リズム

リズムに関してはマルチスピーチなどによる分析が行えないため、歌曲のリズムと朗読のリズムとを照らし合わせながらその一致度を考察していくこととした。対象とした歌曲は、音高の分析を行った10曲である。

リズムについて考察する上では、アクセントの位置を重視した。ロシア語の単語は原則としていずれかの音節の母音に必ずアクセントがあり、その音節はほかのものより強く、少し長めに発音する。アクセントの位置で一つの単語の意味が成り立っており、例えば日本語の「て・に・を・は」はアクセントの位置の移動によって表現される⁴⁾。従ってロシア語においてはアクセントの位置は絶対であり朗唱法を実現する上で欠かせない要素である。アクセント母音が強拍に置かれていればそれは強く歌われることになり、他よりも長い音符が当てはめられていればそのシラブルが強調されることになる。そのため、リズムにおいては1. アクセントの付いたシラブルが強拍に来ているか、と、2. アクセントの付いたシラブルが単語内の他のシラブルより長音か、という点に注目して分析することとした。

アクセントのついたシラブルが強拍にきているかどうかについては、全アクセント母音中、いくつかのアクセント母音が強拍に置かれているかを集計し、パーセンテージを出した。そしてアクセントのシラブルが単語内の他のシラブルより長音かどうかについては、他のどのシラブルよりも長音であった場合は○、同じ長さのシラブルがあった場合には△、他により長いシラブルがあった場合には×として集計し、パーセンテージを出した。

2. 分析と考察

選出したムーソルクスキイの歌曲10曲の音高関係の一致度は次のとおりである（表1）。

表1 音高関係の一致度

歌曲名	作曲年	作詞者	音高関係の一致度	
			音高が取れなかった箇所を一致と考えた場合	音高が取れなかった箇所を不一致だと考えた場合
星よ、おまえはどこに？	1857	H. グレーコフ	70%	24%
神学生	1866	M. ムソルグスキー	48%	32%
ドン川のほとりの庭に花咲き	1867	A. コリツォーフ	26%	25%
隅っこで	1870	M. ムソルグスキー	64%	57%
おやすみの前に	1870	〃	60%	58%
壁に囲まれて	1874	A. ゴレニーシチェフニク トゥーゾフ	53%	42%
きみは私に気付かなかった	〃	〃	63%	57%
子守歌	1875	〃	62%	54%
亜麻を紡ぐのは若者の誉れか	1877	A. K. トルストイ	62%	49%
蚤の歌	1879	ゲーテ『ファウスト』より A. ストルゴフシチコーフ訳 (笑い声はムソルグスキーの創作)	60%	46%

またリズムの分析結果は以下の通りである（表2）。

表2 リズムの分析結果

歌曲名	作曲年	アクセントが強拍にきているか	アクセントのシラブルが単語内の他のシラブルより長音か	
			シラブル内で1番長いもののみで集計した場合	他に同じ長さがある場合も含めた場合
星よ、おまえはどこに？	1857	68%	16%	100%
神学生	1866	88%	27%	89%
ドン川のほとりの庭に花咲き	1867	93%	52%	93%
隅っこで	1870	75%	9%	82%
おやすみの前に	1870	68%	24%	97%
壁に囲まれて	1874	93%	46%	96%
きみは私に気付かなかった	〃	80%	65%	100%
子守歌	1875	77%	60%	96%
亜麻を紡ぐのは若者の誉れか	1877	76%	32%	79%
蚤の歌	1879	87%	69%	95%

分析のために選んだ歌曲は、習作期から3曲、自己形成期から2曲、円熟期から5曲の計10曲である。曲を選ぶ上では、習作期、自己形成期、円熟期の各年代区分³⁴から選出することにまず留意した。その他では、ムースルクスキ自身が作詞した歌曲とそうでない歌曲、複数の登場人物が現れるような特徴的な歌詞の歌曲と、独白形式の歌詞の歌曲などがまんべんなく入るように選出した。また、筆者自身が楽譜を見ながら朗読を聴いたときに受けた印象も参考にした。

表1、表2では選出したムースルクスキの歌曲を年代順に並べている。表1にある「音高が取れなかった箇所」というのは、基本的には子音の発音部分をマルチスピーチが読み取らず音高が採取できなかった部分を指している。また、歌曲において1音節に対して複数音が当てはめられている箇所でも（メリスマ様式）、朗読では1音節内で音高が大きく上下することはあまりないため、そのような箇所でも歌曲での1音に対する音高が取れないことになる。それも「音高が取れなかった箇所」に含めた。

ここで音高の取れなかった箇所を不一致とした場合の結果に注目してみると、1870年を境にムースルクスキの歌曲における音高関係の一致度が上がっていることが分かる。1857～1867年のムースルクスキの歌曲ではその一致度は20～30%台だが、1870年以降は40～50%台に上がっているのである。1870年はムースルクスキの自己形成期にあたる時代であり、ここで歌曲の作曲についてなんらかの転換があったのではないかと推測される。その中でも、中期の作品である《隅っこで》と《おやすみの前に **На сон грядущий**》は、数値がかなり高い。この2曲は歌曲集〈子供部屋〉の中の曲で、ムースルクスキが子どもの話し言葉を歌曲にするために自身ですべて作詞し、曲をつけたものである。この頃からムースルクスキの朗唱法はより確実なものとなっていったのではないだろうか。この中期の2曲は完全にシラビクに書かれているので、音高が取れなかった箇所はすべて子音が採取できなかった部分である。この点から考えても、この2曲の音高関係はかなり一致しているといっていよう。

また、表2で特徴的な結果が出ているのも《隅っこで》である。アクセントが強拍にきているかどうかの項目では75%とほかの曲に比べても高くもなく、低くもない数値が出ている。しかし「アクセントのついたシラブルが単語内のほかのシラブルより長音か」、という項目では、「シラブル内で1番長い音符が当てはめられていた場合」の数値はたったの9%である。これは10曲の中で飛びぬけて少ない。1桁の結果が出ているのは《隅っこで》だけである。しかし、「ほかに同じ長さの音符が当てはめられたシラブルも含めた場合」では、82%とほかの曲と比べても同等の結果が出ている。これはいかなることを示しているのだろうか。《隅っこで》より前の作品、《ドン川のほとりの庭に花咲き **По-над Доном сад цветёт**》では「シラブル内で1番長い音符が当てはめられていた場合」の結果は52%であり、10曲全体の中で見ても低くない。1度アクセントのついたシラブルに長音を当てはめる、という方法を試みているにもかかわらず

らず、その後またやめているのはなぜだろうか。《隅っこで》のほかに、《星よ、おまえはどこに》、《神学生》、《おやすみの前に》、《亜麻をつむぐのは若者の誉れか》でも、「シラブル内で1番長い音符が当てはめられていた場合」の数値がやや低い。この5曲のうち3曲はムースルクスキイ本人による詩が使用されている。この結果が詩の形式、内容と関係があるのがどうか、詳しく分析していくこととする。

II. 歌曲《隅っこで》

1. 歌曲《隅っこで》について

《隅っこで》は歌曲集〈子供部屋〉に収録されている歌曲である。歌曲集〈子供部屋〉はダルゴミーシスキイ Александр Сергеевич Даргомыжский (1813-1869) に献呈されており、ドビュッシーに「傑出した作品」と評されたことでも知られている⁶⁾。《隅っこで》が作曲されたのは1870年であるが、この年はオペラ《ボリス・ゴドゥノフ》が完成し、マリイーンスキイ劇場の委員会に提出した年で、ムースルクスキイの生涯の中で創作活動がもっとも充実していた時期と言える。

この歌曲集〈子供部屋〉はムースルクスキイが自ら作詞しているという点で特徴的であるが、特に子供の口語体で書かれているという点が他の歌曲とは大きく違う。歌曲集〈子供部屋〉には7曲あるが、どの曲も基本的に子どもの視点から描かれている。《隅っこで》も含め大人が登場する曲も3曲あるが、いずれも子どもの話し相手として出てくるだけで、どの曲も主人公は子どもである。どれも子どもの日常の一場面を切り取ったものになっており、自然な生活を描こうとしたムースルクスキイの意欲が伺える。歌詞は、登場人物が2人いる場合はもちろん対話形式になっているが、1人の曲もモノローグではなく誰かに話しかけているような口調になっている。

《隅っこで》は歌曲集〈子供部屋〉の中では2曲目にあたる。登場人物はばあやと男の子の2人で、内容は悪さをした男の子がばあやに怒られるというものである。全部で59小節から構成されているが、前半33小節がばあやによる説教、後半26小節が男の子の言い訳とはっきり区別されている。拍子は3回変化するが、それはすべて前半で起こっており、子どもの言い訳の部分では拍子の変化は起こっていない。

2. 楽曲分析

先程提示した表1、表2から、《隅っこで》の結果のみ抽出したものを提示する(表3)。筆者が分析を行う前に楽譜を見ながら朗読を聞いた際には、音高、リズム共に歌曲と朗読がかなり一致している印象を受けた。しかし実際には以下のような結果が出ている。

表3 《隅っこで》の分析結果

音高関係の一致度		リズムの一致度		
音高が取れなかった箇所を一致と考えた場合	音高が取れなかった箇所を不一致だと考えた場合	アクセントが強拍にきているか	アクセントのシラブルが単語内の他のシラブルより長音か	
			シラブル内で1番長いもののみで集計した場合	他に同じ長さがある場合も含めた場合
64%	57%	75%	9%	82%

前述のとおり、表を見ると音高関係の一致度はかなり高いことが分かる。「音高が取れなかった箇所を不一致と考えた場合」の数値は57%だが、これは分析を行ったムースルクスキイの歌曲10曲の中でも2番目に高い数値である。ちなみに最も高いのは同じ歌曲集〈子供部屋〉の中の《おやすみの前に》であり(58%)、やはり歌曲集〈子供部屋〉は朗唱法が追求されている曲集だと考えられる。

それに比べて特徴的なのは先に述べたとおり、「シラブル内で1番長いもののみで集計した場合」の9%という結果である。この項目でもっとも高い数値が出た《蚤の歌 Песня о Блохе》の結果は69%なので、その差は実に60ポイントもあるということになる。なぜ楽譜を見て朗読を聞いた際には一致度が高いと感じたのに、リズムにおいてこのような結果が出ているのだろうか。筆者はその理由は歌詞の内容にあるのではないかと考えた。《隅っこで》には子どもを叱るばあやと言い訳をする男の子という2人の人物が出てくるため、曲の前半と後半では大きく雰囲気が変わっている。後半は男の子の不安な感情を表現するために調性も不安定になっており、テンポも数回変化している。そのような子どもの不安な感情や子ど

もらしさを表現する一環として、後半部では朗唱法も意図的に崩してあるのではないだろうか。

そのように考えリズムの一致度の内容について詳しく見たところ、やはり前半と後半では大きな違いが見られた。ばあやの説教の部分では、アクセント母音は1箇所を除いてすべて強拍に当てはめられていたが、後半の男の子の言い訳の部分においては、41の単語のうち、そのアクセント母音が強拍以外の拍に当てはめられていた単語は13もあったのである。また、前半部ではアクセントのついたシラブルにつけられた音符よりも長い音価の音符が他のシラブルに当てはめられている単語はなかったが、後半部ではそのような単語も見られた。そのような違いもあって、単純にアクセントのついたシラブルについて全体を集計した結果が低くなってしまったのであろう。したがって、《隅っこで》の分析においては前半部と後半部に分けてくわしく考察することとする。

a. 前半部

先述の通り、前半の33小節はばあやによる説教の部分である。テンポはAllegro moltoで、3回の拍子変化が見られる。前半部の歌詞は“**Ах, ты, проказник!** (まあなんて悪戯っ子!) **Клубок размотал…** (糸玉をほどこちゃって…) **Прутки растерял!** (編み棒をどこかにやっちゃって!) **Ахти! все петли спустил!** (まあ! 網目をみんな外しちゃって!) **Чулок весь забрызгал чернилами!** (ストッキングをすっかりインキで汚しちゃって!) **В угол!… в угол! Пошёл в угол!** (隅に行ってください! …隅に! …隅に行くんです!) **Проказник!** (悪い子ね!)”となっている。エクスクラメーション・マークが多く使用されているのが特徴的で、比較的短い文章で全体が構成されている。

ここでまず前半部の歌曲と朗読の音高関係をグラフにしたものを載せる(図1)。このグラフでは、音高の一致度を求める際に文の切れ目と判断した箇所を離して表示している。

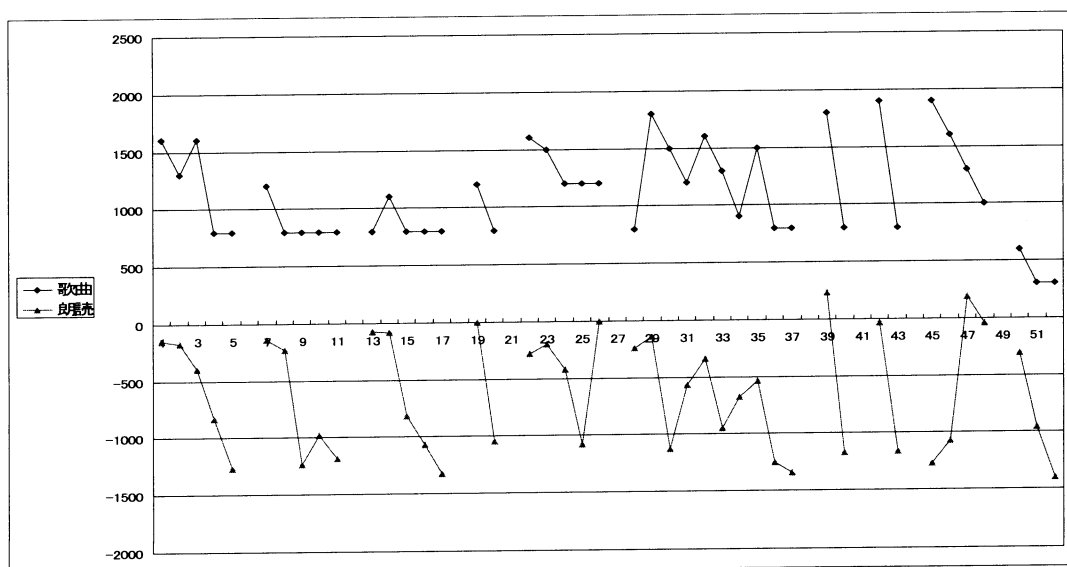


図1 《隅っこで》 前半部分の音高関係

グラフを見ると分かるように、前半部において歌曲と朗読の音高の上がり下がりほぼ一致していると言って良い。ほとんどの文章が高い音から始まり低くなっているが、その特徴をよくとらえて作曲されている。そして文章中の単語に注目して見ていった場合、この前半部にシラブルが2つ以上ある単語は16あるが、単語内での高低が一致している単語は11である。一致していない箇所5つのうち3つは、朗読では何らかの音高の変化が起こっているのに対して歌曲の音高が変化していない(同じ音)という結果が出ている。そしてそれはどれも文末にある単語である。

大きく朗読と歌曲の音高の上がり下がり異なっているのは最後から2番目の部分で、ここは歌詞では“**Пошёл в угол!** (隅に行ってください!)”に当たる。**Пошёл**は2音節からなり、朗読では**По**のシラブルの方が**шёл**のシラブルより音高が低くなっているのだが、歌曲では**По**のシラブルのほうが高いのである。譜面では26、27小節目になるのだが、ここは拍子に変化する場所でもある(譜例1)。

譜例1 《隅っこで》 18~33小節

この部分で音高における朗唱法が徹底されていないのは、音楽的な表現を優先したからではないかと考えられる。《隅っこで》の前半部分はAllegro moltoと指示されており、かなり速いテンポで進んでいく。特に伴奏部ではオクターブのユニゾンで8分音符による連譜が絶え間なく奏され、前半部の急速な雰囲気は拍車をかけている。これはエクスクラメーション・マークが多用されている歌詞の勢いを表現するためであろう。しかし“**Пошёл в угол!** (隅に行ってください!)”にあたる26、27小節目ではそれまでの3/4拍子が4/4拍子に変更され、伴奏にも休符が入る。26小節目から29小節目までの間に立て続けに起こる3回の拍子変化と、休符を挟んだ音型の下降と相俟ってブレーキがかかるような印象が与えられ、フェルマータの伸ばしに到達するのである。これによって“**Пошёл в угол!** (隅に行ってください!)”という台詞が強調されると共に、子どもの言い訳に場面転換をするための準備ができていく。このように、ばあやの説教のクライマックスのために、**Пошёл**という単語の音高は無視されたのではないだろうか。音高は一致していないものの、アクセントの位置は強拍に置かれている。

続いてリズムの分析結果に注目して見ていく。この前半部の歌のパートは付点2分音符が1箇所あるだけで(13小節目)、他はすべて4分音符で構成されている(譜例2)。

Allegro molto

譜例2 《隅っこで》前半33小節間 歌部分

全部が同じ長さの音符なので一見長短の差が出ていなように思えるが、ほぼ全て同じ音符で構成されている中でアクセントのついたシラブルがほぼ全て強拍に来ているのでアクセントの付いたシラブルが強調され、リズムにおける朗唱法が実現されているように聞こえるのだと考えられる。後半に行くにつれて強拍にはより音程の高い音符が当てはめられるようになっており、同じ音価で構成されたメロディーの朗唱法やばあやの怒りの感情の表現をより強化している。

しかしこうして見てみると、《隅っこで》前半部においてはリズムよりも音高のほうがやや話し言葉に忠実に書かれている。アクセントのついたシラブルが強拍に置かれるのはムースルクスキに限らずロシア歌曲に共通して見られる特徴なので、朗唱法を特に追求した結果とは言い難い。自己形成期はリズムよりも音高を重視して作曲していたのだろうか。引き続き後半部についても分析し、考察していくこととする。

b. 後半部

後半は男の子による言い訳の部分である。26小節からなり、拍子変化はない。小節数自体は前半部よりも少ないが、歌詞は前半部よりも長い。後半部の歌詞は“Я ничего не сделал нянюшка, (僕はなんにもしてないよ、ばあや、) Я чулочек не трогал, нянюшка, (僕はストッキングなんかいじってない、ばあや、) Клубочек размотал котёночек, (糸玉をほどいたのは子猫だよ、) И пруточки разбросал котёночек. (編み棒をばらばらにしたのは子猫だよ、) А Мишенька был пайнька, (ミーシェニカはおとなしかったよ。) Мишенька был умница. (ミーシェニカはお利口さんだった。) А няня – злая, старая, (でもばあやは意地悪でよぼよぼだ。) У няни носик-то запачканный, (ばあやのお鼻は汚れてる、) Миша чистенький, причёсанный, (ミーシャはきれいで髪もとかしてる、) А у няни чепчик на боку. (でもばあやの頭巾は横っちょだよ。) Няня Мишеньку обидела, (ばあやはミーシェニカに意地悪した!) Напрасно в угол поставила! (隅っこに立たせても無駄だからね!) Миша больше не будет любить свою нянюшку! (ミーシャはもうばあやを嫌いになってやるんだから!) Вот что…! (そうなんだから!)”となっている。コマで区切られている箇所が多く、前半に比べるとかな1文が長い。

楽譜にはA doppio piu lentoの表示が冒頭にあり、前半部に比べると大分遅いテンポに設定されてある。後半部では拍子の変化はないが、前半と違い表現や速度に対する指示が見られる。また、前半部と大きく違うのは使用されている音符の音価の種類が多いという点である(譜例3)。

A doppio piu lenro

The musical score is written in treble clef with a 3/2 time signature. It consists of six staves of music. The first staff begins with a whole rest. The second staff starts at measure 5. The third staff starts at measure 9 and includes a triplet of eighth notes. The fourth staff starts at measure 13 and is marked 'capriccioso'. The fifth staff starts at measure 17 and includes a 'poco ritard.' marking and another triplet. The sixth staff starts at measure 21 and ends with a double bar line.

譜例3 《隅っこで》後半26小節間 歌部分

前半部で歌パートに使用されていた音符は4分音符と付点2分音符の2種類だけで、それも付点2分音符は1つしか使用されていなかったが、後半部では16分音符、8分音符、4分音符が使用されている。また、3連符も頻繁に用いられ、テンポも一定で勢いのあった前半部に比べると不規則な印象を受ける。これらの違いはひとえに、怒っているばあやと言いつくしている男の子の心情の差を表現するためのものだと考えられる。調性も前半部は最初から最後までb-mollで書かれているが、後半部では頻繁に転調が行われ、子どもの不安な気持ちを表現している。では朗唱法においてはどのような工夫がなされているのだろうか。

ここでもまず音高関係のグラフを載せる(図2)。

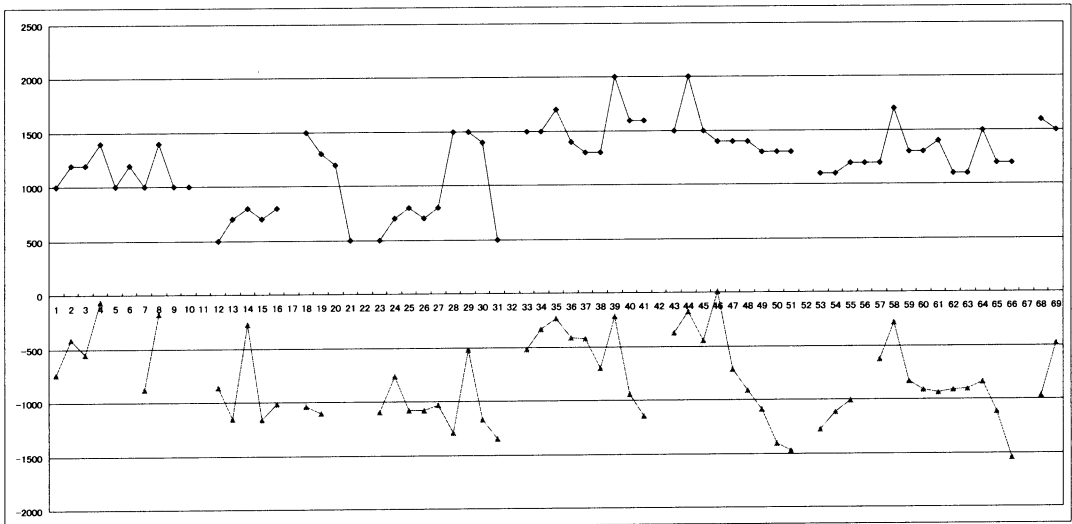
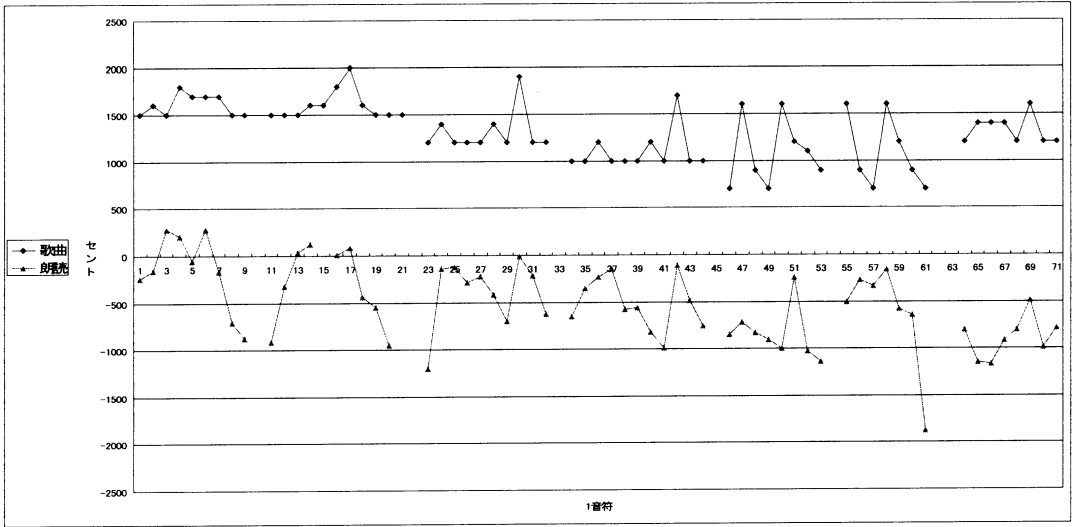


図2 《偶っこで》 後半部分の音高関係

グラフを見ると、おおまかな高低は一致していると言える。前半部の朗読では高い音程から入り低くなっていく特徴がみられたが、後半部の朗読においてはそのような特徴は見られず、文の途中で音高が上がる山型のグラフになっている。そしてそれは歌曲でもきちんと再現しており、やはり自己形成期において音高に注目した朗唱法をムースルクスキが徹底していたことが分かる。また、前半部と同じように文末を同じ音程の音で処理している箇所もいくつも見られるので、このような朗唱法の方法をムースルクスキが好んで用いていたのではないかと推測がなされる。

それに比べ、やはりリズムはあまり忠実に再現されているとは言えない。アクセント母音あまり強拍に当てはめられていないのは先述のとおりだが、特徴的なのはアクセントの位置に関係なく文末に当たるシラブルに長い音価の音符が当てはめられている点である。後半部の歌詞は14行で書かれており文の切れ目もそれに沿っているのだが、そのうち10の文が他のシラブルより長い音価の音符で終わっている（譜例4）。



譜例4 《隅っこで》後半部 長い音価の音符で終わる1文の例

この手法はアクセントの位置に関係なく行われている。日本でも、幼児が格助詞や語尾を延ばして喋る話し方が見られることがあるが、ロシアでも幼児にこのような特徴が見られるのではないだろうか。この文末を長めに言う特徴がロシア人の幼児全般に見られるものなのか、言い訳をする男の子の心情を表現するためのものなのかは引き続き研究を続ける必要があるが、すべて4分音符で構成された前半と大きく異なった性格付けがなされているのは間違いない。

語尾に長い音符が当てはめられていない文は4つあるが、そのうち2つは“А Мишенька был паинька, (ミーシェニカはおとなしかったよ。) Мишенька был умница. (ミーシェニカはお利口さんだった。)”という箇所である。これは今まで自分の悪さを猫のせいにしていた男の子が、今度は自分はおとなしくしていたと主張するところで、歌曲では1文と1文の間に8分休符しか入っていない。それまでは1文ずつが4分休符で区切られていたのだが、ここで自分の潔白を証明しようと「ミーシェニカは、ミーシェニカは」とたまたみかけるように喋るため、語尾が伸ばされていないのであろう。また、最後の一言である“Вот что…! (そうなんだから!)”という台詞は唯一語尾の方が短くなっている文となっている。これは「ミーシャはもうばあやを嫌いになってやるんだから! そうなんだから!」の「そうなんだから!」に当たる部分で、男の子の怒りの感情を表現するために最後の単語を短い音符にして勢いを出しているのであろう。

III. まとめ

ここまでの分析で明らかになったのは、まず音高に関しては文章中で音が高くなる部分が特に忠実に再現されているという点である。文末の音高が微妙に下がっていく部分などは、歌曲では同じ音高で表現されていることが多く、話し言葉の最初から最後までが丁寧に実現されているわけではない。

またリズムにおいては、大人と子どもの喋り方に変化を持たせて音価が当てはめられていたのが特徴的であった。怒っている人物と怒られている人物、という対比も含まれているため、大人と子どもの話し言葉を書き分けていると一概には言えないが、その人物の感情まで視野に入れてリズム付けがなされていた。つまり、音高と比較すると、リズムでは朗唱法よりも人物描写や感情表現が優先されていたと言える。

以上の結果を踏まえ、さらに習作期、円熟期の歌曲の分析に当たりながら、ムソルグスキーの朗唱法の推移を明らかにしていきたい。

注および引用参考文献

- i 新村出編『広辞苑 第4版』岩波書店 1994
- ii ショスタコービッチ 小林久枝編『ショスタコービッチ歌曲集1』全音楽譜出版社 1991 p. 221
- iii 年代区分に関しては以下の資料を総合し、自分なりに妥当と思われる区分を決定し記載した。
 - ・勝部太 塚本靖彦「ムソルグスキーの声楽作品—その生涯と作品への一考察」『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 36巻』2001 pp. 1-18
 - ・佐々木倫子「歌曲における朗唱法(その2)—ムソルグスキーの『子供部屋』に見る—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第5巻第1号 1997 pp.231-243
- iv 門馬直美ほか監修『最新名曲解説全集 第23巻 声楽曲Ⅲ』音楽之友社 1981 p. 111
- v 菊池可奈子「ムソルグスキーの歌曲に見られる和声的特徴」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』第19号 2007 pp.141-149 pp. 144-145

参考楽譜

- ・ムソルグスキー『ムソルグスキー歌曲集』全音楽譜出版社 1995